



ま
ち
の

達人

TATSUJIN

リーディング キャラバン

大竹 富三江

3月、豊橋技術科学大学の留学生を送る会に出席した際、その中に、完璧な日本語を操るバングラデシユの留学生がいました。同席者への皮肉を込めて、「御専門の環境学は置くとして、日本人学生に正しい日本語を教えてあげてください」と賞賛しました。隣席の田原市役所職員の方も「ほんとうに、僕のところへは、職員研修にも来てください」などと言い、居並ぶ学長、副学長らは苦笑でお茶を濁しました。そして座は一気に和み、例年になく代表の学生、市町の担当者、教授たちは意思疎通をはかりました。

しかし、美しさとともに難解さでも世界に冠たる日本語です。私たちは、子どもたちに正しく美しい日本語と楽しい読書を体験してもらおうと市内8校を巡回しています。メンバーは元氣はつらつ、年齢知らずの女性15人です。その一方で、保健センターと図書館が「0才から本を」と提唱し実施しているブックスタート事業へも参画しています。生後4カ月の乳児の牙えざえと澄む神の如き瞳に見つめられてページを操る、この時こそ真摯に人生を考えます。

以下に掲げるのは、4月、北部小学校で行った出前授業で、6年生の牧原君、伴君、吉本さんから寄せられた感想文(一部を抜粋)です。これこそが私たちの勇氣と活力の源です。

「大竹先生、今日の本ちよつとこわかったです。ただ海の生き物やクジラに恋の感情があるんだと思った」、「戦争の話をしてくれたからせつなさがわかったし、いろいろなことがきけてよかったです。クジラが死んでいくのがひさんだったので戦争のこわさがとてもよくわかってよかったです」、「読み聞かせ、すぐおもしろかったです。いつもみたいなの絵本ではなく、耳だけで聞き、自分で想像するのも楽しかったです」。

水族館

学芸員 小林龍二

竹島水族館 ☎68・2059

先日、映画「崖の上のポニョ」を観てきました。魚系の映画とあっては水族館人として絶対に押さえておかねばならないと思ひ、指定席をとって真剣に見ました。

過去に人気を博した映画「ニモ」でおなじみの「カクレクマノミ」は今でも水族館で一番人気のある魚で、水族館では、もはや展示必須魚となつています。ニモの時は、市内の観賞魚店から父・母子の3匹を仕入れて展示し、子どもたちに大ヒットしました。この時のカクレクマノミ家族は今でも私の担当水槽で元氣に泳いでおり、私にとっても思い入れのある魚です。さて今回、真剣に観てきた

ポニョの展示は難しい

「ポニョ」ですが、もともと魚のモチーフがないようで、「ポニョを展示しています！」ということができません。実は、ニモの時のように子どもたちが喜ぶ水槽を作つてやろうとたくらんで、内容はそつちのけで映画を観ていました。しかし、映画では、古代の風景や生き物が多く出てきたので、これは隣の生命の海科学館におまかせです。

その後もなんとかこの映画にちなんだ魚はないものかと魚類図鑑を何度も見ましたが、何しろポニョが何の魚なのか不明ですし、ポニョの父親は水中人間、母親は人魚なので、もはやお手上げです。自分で赤い服を着てカツラをかぶつて、水槽で泳ぐのが一番よさそうです。

流行の魚などがメディアで取り上げられると嬉しいのですが、そんなに頻繁にはなく、この夏にできたのはオリエンピックの卓球で活躍した「愛ちゃん」水族館のアシカ・アイにアヤかったショーぐらいでした。